HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	“κατα φυσιν οικισεισα πολιζ” (Plato’s Republic 428E)考 : プラトン・国家篇における人間のφυσιζについて
Author(s)	中村, 一彦
Citation	北海道大學文學部紀要, 15(1), 186-160
Issue Date	1966-12-10
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/33313
Type	departmental bulletin paper
File Information	15(1)_PL186-160.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

"Κατὰ φύσιν οἰκισθεῖσα πόλις" (Plato's Republic 428E) 考

——プラトン・国家篇に於ける人間の φύσις について——

中　村　一　彦

"Κατὰ φύσιν οἰκισθεῖσα πόλις" (Plato's Republic 428E) 考

——プラトン・国家篇に於ける人間の φύσις について——

中　村　一　彦

The meaning of "κατὰ φύσιν" in the phrase "κατὰ φύσιν οἰκισθεῖσα πόλις" (428 E) in Plato's Republic.

——A few remarks on the meaning of the φύσις of man in Plato's Republic.——

Kazuhiko Nakamura

（1） 問題提起の意義

プラトンの *ΠΟΛΙΤΕΙΑ*[1]（Rep. と略称）の表題は恐らく国家というよりも国制を意味し（例えば 471 C, 499 C, 562 A etc. の πολιτεία の意味は明かに国制を指している。），副題の περὶ δικαίου[2] は正《τὸ δίκαιον》の考究を指してはいるけれども，[3] この書の主題は正義の徳《δικαιοσύνη》の何たるかの探究にあるであろう。たしかに彼の作品の中期のピークをなすこの長篇に於ては，周知の様に，問題は多岐にわたり，諸々の収獲が提示されてはいるが，それらの諸問題を貫いて探究されているのは，人間主体の諸徳《ἀρετή》の一つとして一般に考えられている δικαιοσύνη[4] を，改めてその何たるかを問い，当時の δικαιοσύνη（乃至は τὸ δίκαιον）についての諸々の俗見に対して，[5] δικαιοσύνη こそは人間のよき生にとって不可欠であることを示すことによって，δικαιοσύνη 擁護の論陣を張っていると考えられる。

"*Κατὰ φύσιν οἰκισθεῖσα πόλις*" (Plato's Republic 428 E) 考

註

（1） この表題の証拠はプラトンの門下生アリストテレスの，例えば Politica, 1264 b 28 などにみられる。

（2） Cf. Diogenes Laertivs, III, 60

（3） Rep. に於ける *τὸ δίκαιον* と *δικαιοσύνη* とに関する問題点に論者が始めて気づかされたのは恩師高田三郎教授の論文「*πόλις* の *φύσις* 性と *τὸ δίκαιον* の *φύσις* 性」（西洋古典学研究 I, 岩波, 1953）の示唆に負ったことをここに感謝申上げると共に，この問題に関しては他日論考することにして今はふれない。

（4） 例えば "*ἀλλ' ἡ δικαιοσύνη οὐκ ἀνθρωπεία ἀρετή*;" 335 C。ポリスの *δικαιοσύνη* という場合はポリスを個人に比しているからである。それは個人を小文字，ポリスを大文字で書かれてあるものに比している点からも明かであるが(次の本論参照)，なお彼が統一あるポリスを個人内部の統一と類比的に考えていることは，例えば 462 B 以下（特に "*καὶ ἥττις* [sc. *πόλις*] *δὴ ἐγγύτατα ἑνὸς ἀνθρώπου ἔχει*; *κ.τ.λ.*"）に明確に示されている。

（5） 特に I, v, 330 D—II, ix, 367 E を参照。

その際プラトンは個人内部を小文字で，ポリス内部を大文字で書かれてあるものになぞらえ，*δικαιοσύνη* の問題を人間主体からポリスに移し，大写しにされた *δικαιοσύνη* の方を先ず探究するという方途を採っている（II, 368–369)。

Rep. ではこの意味で始めて，あの紙数の大部を占めるポリス(乃至は国制（ポリーテイアー）) の問題が検討されてくるのであり，彼はポリス内部に如何にして *δικαιοσύνη* が生じて来るかを見ようとして，言論の上で[6]ポリスを建設する作業にとりかかるのである（II, 369 B ff.)。

小論の表題とした "*κατὰ φύσιν οἰκισθεῖσα πόλις*" という phrase は，実はかかる意図の上に立ってプラトンが言論の上で「最も必要なものだけのポリス《*ἀναγκαιοτάτη πόλις*》[7]」（369 D）から発展せしめて「最善のポリス《*ἀρίστη πόλις*》」(cf. 434 E; "*τελέως ἀγαθήν*" 427 E) を建設してみせ，その内部に生する *δικαιοσύνη* を検討する途上での発言であり，全篇を通じて只一度しか述べられていないにもかかわらず，当篇でのポリス建設全体の基本線を要約する性格を示していると考えられ，その意味内容を検討することは，プラトンの建設してみせるポ

リスの性格を明らかにするに資するばかりでなく，ひいては主題の δικαιοσύνη 理解の基底にもなりうると考えられる。

註

（6） τῷ λόγῳ (369 C)。この意味のとり方が問題であることは諸訳が甚だまちまちであることをみても分るであろう。諸訳は凡そ三つに大別されるであろう。1) λόγος を思考乃至観念と解するグループ。即ち Apelt, Schleiermacher, Jowett & Campbell (註), 等で，その極端を代表するのは Cornford 訳 "our imaginary state" の "imaginary" であろう。こうした解釈の淵源は恐らく，Rep. で建設されるポリスがこの地上のどこにもなく天上に典型としてあるだろうなどというプラトンの言葉 (cf. 592 A) に主として在するのであろう。2) 理論 (theory) と訳す Shorey, 3) 対話と訳す長沢氏。
論者としては，対話という形式でポリス建設を論じている実情に照らし，然し単に観念的理想論でも，単なる理論でもないという点に重点をおいた意味で本文の様に山本氏訳を拝借した。但しこの語には以上からでも明かな様に，ポリス建設の性格—ひいては所謂理想国の性格に根本的に関わる意義を有する故，ここで詳論することは出来ない。何故なら，かかる問題を明かにするための基礎作業の一つが本稿の目的なのであるから。

（7） 即ち，人々の生きる為の要求を充たす最小限度必要な条件下のポリス。

（2） "κατὰ φύσιν οἰκισθεῖσα πόλις" の問題

この phrase の意義に注目しているのは今に始まったことではない。論者の知る限りでも既に A. Krohn, 次いで Alfred Benn, 更にはっきり再確認しているのが J. Adam, 次いで邦訳をものされた長沢信寿の諸氏である。(8) しかし，Krohn, Benn よりは後ではあるが Adam の註釈書よりは前に刊行された Jowett & Campbell の註釈書では全く言及されておらず，むしろ Adam の見解の根拠には反対の様にさえ推測される。(9) 又 Krohn よりも以前に刊行された G. Stallbaum の，古いが然し今日なお有用な註釈書では全く言及されていない。(10) この様な事情もこの phrase の意味と意義づけとについての再検討の必要を一層うながす。

註

（8） Cf. A. Krohn; Der Platonische Staat, Halle, 1876 SS. 59–64.
„ ; Die Platonische Frage, Halle, 1878 SS. 7–8.

Alfred Benn; The Idea of Nature in Plato (Archiv für Geschichte der Philosophie, Bd. IX, Berlin, 1896) pp. 36-37.

J. Adam; The Republic of Plato, Cambridge, 1938, Vol. I, p. 227, p. 95.

長沢信寿訳「国家」(一) 弘文堂, (昭 24.10), 245—246頁; (二), (昭 27.11), 559頁。

(9) Jowett & Campbell; The Republic of Plato, Oxford, 1894, Vol. III, Notes, では註記されていないし, 又 Vol. II, Essays, pp. 318-321 の, プラトンの哲学用語としての φύσις の項の説明でも Adam の見解に組する様な説明はされていない (詳しくは後に述べる)。

(10) Cf. G. Stallbaum; Platonis Politia, Gotha, 1858.

さて, その再検討に先立って留意しなければならないのは, プラトンの対話篇は周知の様に文字通り「対話」《dialogue》であって, それぞれの言は対話の流れのそれぞれの処に具体的に息づいており, その流れの中の一つの phrase を抽出してそれだけに照明をあててともすれば強調して検討することは, 普通の学術論文(それは monologue である) の場合に較べて格段に細心の注意・戒心を要するという点である。この場合もこの phrase の context から検討し始めるのが妥当と考えられる。でなければ R. Robinson のいう "mosaic interpretation" の誤り並に "misinterpretation by abstraction" を犯すことになるであろう。(11)

註

(11) Cf. R. Robinson; Plato's Earlier Dialectic, Oxford, 1953, I. Introduction: The Interpretation of Plato.

彼は, 原典の部分乃至一文を文脈全体の見通しの上から解せず不当な weight をおいて解す誤りを "mosaic interpretation", 又或る一つの言及び事実を抽象化しすぎて当人の明瞭に云わなかった程にまで抽象してそれを当人が主張したかの様に推論する場合生ずる誤りを "misinterpretation by abstraction" と称している。

ところでこの phrase の前後の context はおよそ次の如くである。プラトンはポリスを言論の上で建設してみせて, ほぼ次の様な論旨を述べている。

そのポリスがいやしくも正しく《ὀρθῶς》建設されているのなら，それは完全に善い《τελέως ἀγαθή》ポリスだと私は考える。——だからそのポリスには所謂四つの徳，即ち智慧《σοφία》・勇敢《ἀνδρεία》節制《σωφροσύνη》・正義《δικαιοσύνη》が現成しているのは明かである

として，それらの徳の一つ一つをそれがどこに見出されるかの検討を始める（427 C ff.)。件の phrase が登場するのは，以上をうけて第一に σοφία がポリスのどこに見出されるかを探究する段階に於てである。即ち，

このポリスを智慧ある《σοφή》ものたらしめているのは，例えばポリス構成員の大工や鍛冶屋の知識《ἐπιστήμη》の如くポリスの一部を賢くする（即ち市民の一部つまり大工や鍛冶屋が賢いといわれるに止まる）種類の知識ではなく，ポリス全体を σοφή たらしめる知識でなくてはならない。かかる知識はポリス全体のために熟慮する守護者達の有つべき知識《ἡ φυλακικὴ ἐπιστήμη (428 D)》でなくてはならない。ところがかかる知識の所有者たる守護者はポリス構成員の他の者に比して最も少数であろう。してみれば κατὰ φύσιν οἰκισθεῖσα πόλις は，この少数者たる守護者達の有つ知識によって，全体として σοφή なのだろう。

> "τῷ σμικροτάτῳ ἄρα ἔθνει καὶ μέρει ἑαυτῆς (i.e. πόλεως) καὶ τῇ ἐν τούτῳ ἐπιστήμῃ, τῷ προεστῶτι καὶ ἄρχοντι, ὅλη σοφὴ ἂν εἴη κατὰ φύσιν οἰκισθεῖσα πόλις." (428 E)

〈即ち，上論のポリスは少数者の有つ知識によってではあるが全体として σοφή になる。換言すればかかるポリスに現成する σοφία は少数者たる守護者の有つべき知識なのだ。〉云々。

件の phrase はおよそこの様な話の筋道に登場してくるのであって，謂わばひらきなおって，これまで建設して来たポリスのことを「ἡ "κατὰ φύσιν οἰκισθεῖσα πόλις" が云々」と語っている context の中

にあるのではないことを先ず留意しておく必要があろう。上掲の引用文 (428 E) では，強調されているのはむしろ "*τῷ σμικροτάτῳ ἔθνει καὶ μέρει ἑαυτῆς καὶ τῇ ἐν τούτῳ ἐπιστήμῃ, τῷ προεστῶτι καὶ ἄρχοντι*" なのであって "*κατὰ φύσιν οἰκισθεῖσα πόλις*" の方ではないと解されて然るべきである。以上の事情を勘考すれば Cornford 訳 "So, if a state is consisted on natural principles, the wisdom it possesses as a whole will be due to the knowledge residing in the smallest part, the one which takes the lead and governs the rest." は諸訳に比して[(12)] context 全体からみての要点をとらえているといえるであろう。

だが然し上掲 428 E の文章で "*κατὰ φύσιν οἰκισθεῖσα πόλις*" に強調がないとはいっても，"*κατὰ φύσιν οἰκισθεῖσα*" のニュアンスを上掲 Cornford 訳或は Apelt 訳 "Durch die kleinste Klasse also ..., wird die ganze Stadt, falls sie der Natur gemäß gegründet worden ist, weisen sein." の様に条件的に訳出（従ってその様に解釈）するのは文章全体に於ける "*κατὰ φύσιν οἰκισθεῖσα πόλις*" の比重を余り軽くとりすぎる弊があるのではないかと考えられる。上の様なニュアンスを以て訳出されたのは，恐らく主文の "*ἂν εἴη*" と "*κατὰ φύσιν οἰκισθεῖσα πόλις*" に定冠詞 "*ἡ*" がないところからと推測されるが，"*ἂν εἴη*" に関してはそのすぐ前の文 "*οὐκοῦν, ἔφην, καὶ τῶν ἄλλων, ὅσοι ἐπιστήμας ἔχοντες ὀνομάζονταί τινες εἶναι, πάντων τούτων οὗτοι ἂν εἶεν ὀλίγιστοι;*" (428 E) の "*ἂν εἶεν*" に呼応しているものである。しかし定冠詞のないことを以て敢えてなお上の如きニュアンスを固執するなら，次の点が充分に生かされないのではないかと考えられる。"*κατὰ φύσιν οἰκισθεῖσα πόλις*" は，その少し前の "*ἐν τῇ ἄρτι ὑφ' ἡμῶν οἰκισθείσῃ* (sc. *πόλει*)" (428 C) のポリスのことがプラトンの脳裏にあって，それを指しながらの表現であると解するのが最もすっきりした context のとり方ではないかと考えられるからである（この場合の定冠詞 "*τῇ*" がついていることについては改めて言及する必

要はあるまい。)。ところがその "*ἐν τῇ ἄρτι ὑφ' ἡμῶν οἰκισθείσῃ* (sc. *πόλει*)" は, これまで建設して来た最善のポリス (427E) を指していることは明かである。この様に context を解す場合, Cornford の "if a state is consisted on natural principles" とか Apelt の "falls sie der Natur gemäß gegründet worden ist" とかの訳文の有つニュアンスは "*κατὰ φύσιν οἰκισθεῖσα πόλις*" の文中での比重を軽くしすぎ, この phrase の意義を不明瞭にしていると断ぜざるをえない。Adam が註で "The subject is *πόλις κατὰ φύσιν οἰκισθεῖσα*" と説明し, "a city founded in according with Nature" と訳までつけているのは, 彼の解する "Nature" の意味の問題については目下別として, この phrase の比重を軽くさせまいとする配慮と考えられ, 従って論者の見解に賛成しているものと考えられる。

してみれば "*κατὰ φύσιν οἰκισθεῖσα πόλις*" は, *δικαιοσύνη* を探究しようとしてこれまでに建設されて来た最善のポリスのことを指しているとみるのが至当であろう。そして前述した通り, 件の phrase の前後の context では重要性に於て第二次的ではあるが, 今述べた様に, それがプラトンのこれまで建設して来た最善のポリスを指している点からすれば, この phrase はかかるポリスの性格を端的に表現している極めて重要な phrase といいうるであろう。この意味での「重要」という点では確かに Adam 等グループの着目は当をえているといいうる。

だが, これまでの建設されて来た最善のポリスの建設の仕方が如何なる意味で *κατὰ φύσιν* なのかに関しては, その理由が Rep. 428 E まででは明らかには述べられていない。我々はそれを明らかにするための下準備として彼のポリス建設のプロセスの大要をかえりみる必要がある。

だがその前に何故かくも "*κατὰ φύσιν*" にこだわるのか, そのもう一つの理由を述べておかなくてはならないであろう。*φύσις* は甚だニュアンスに豊んだ意味を有つ語であって, Rep. でも, *φύσις*, ひいては *τὴν φύσιν*, *φύσει*, *κατὰ φύσιν*, 更に *φύσις* に関連した *φύω* (動詞) の

諸形態等は可成り使用されているが，それらは決して一義的意味を有っていないからである。(13)

註

(12) Cf. F. M. Cornford; The Republic of Plato, Oxford, 1951.

Rep. の訳は周知の通り甚だ多い。その大半にあたることさえも論者の事情として出来なかった。だがここで「諸訳」と述べたからにはその内容を明示しておく義務があると考える。

F. Schleiermacher; Platons Werke, Bd. VI, Berlin, 1862.

O. Apelt; Platon Sämtliche Dialoge, Bd. V, Leipzig, 1920.

C. E. CH. Schneider; Platonis Opera, Vol. II, Paris, 1900.

F. Ast; Platonis Opera, Vol. IV, Leipzig, 1829-

B. Jowett; The Dialogues of Plato, 3 ed., Vol. III, Oxford, 1892.

Thomas Taylor; The Republic of Plato, London (The Scott Library).

P. Shorey; Plato: Republic, I, London, 1946 (The Loeb Classical Library).

長沢信寿訳（前掲）（二）。

山本光雄；プラトン：国家，河出書房，昭30（世界大思想全集）。

岡田正三；プラトン全集第七巻，全国書房，昭23。

(13) Jowett & Campbell; op. cit., Vol. II,pp. 318-321. 又 J. Adam; op. cit., Vol. II, Index II, Nature の項をみてもそのことは容易に察せられるであろう。

Rep. 全部にわたっての詳細な検討は小論の範囲を超える仕事である。ここではただその箇所を大体指摘しておきたい。

Rep. II, 359 C, 365 A, 367 E, 370 B, 374 E, 375 A, B, C, D, E, 376 B, C, 381 B, III, 392 C, E, 395 B, D, 401 A, C, 408 D, 409 E, 410 B, D, E, 411 A, B, IV, 423 D, 424 A, B, 428 E, 429 A, 430 A, 431 A, C, 432 A, 433 A, 437 E, 441 A, 442 E, 443 C, 445 A, B, V, 451 C, 452 E, 453 A, B, C, E, 454 B, C, D, 455 A, B, C, D, E' 456 A, B, C, D 458 C, D, 467 D 470 C, 473 A, D, 474 B, C, 476 B, 477 B, VI, 485 A, B, C, 486 A, B, D, E, 487 A, 489 E, 490 A, B, C, D, E, 491 A, B, C, D, E, 492 A, 493 C, 494 A, B, D, 495 A, B, D, 496 B, 497 B, C, 500 A, B, 501 B, D, 502 A, 503 B, E, VII, 514 A, 515 C, 519 A, C, 525 C, 526 B, C, 530 C, 535 A, B, C, 537 A, C, 538 C, 539 D, 540 C, VIII, 546 D, 547 B, 549 B, 550 B, E, 562 C, 564 E, IX, 572 C, 573 C, 576A, B, 579 A, B, 585 D, 588 D, 589 D, 590 C, 591 B, X, 597 B, C, D, E, 598 A, 601 B, D, 602 D, 605 A, 606 A, 609 A, B, 610 A, D, 611 B, 612 A, 619 D, 620 C, 〔J. Adam の Text に基づく〕。

さてプラトンはポリスを，如何なる人も個人としては自足的たりえないという事実 (369 B) と，それ故，生を営むためには相互に欠を補って色々の要求を充たす他人を必要とするという事実 (396 C) とから，人々は共同生活を営まざるをえないことにその発生の根拠をおき，「最も必要なものだけのポリス《ἀναγκαιοτάτη πόλις》」の建設から着手するのであるが，その際建設の原則として立てられたものは，(1) 人はそれぞれその φύσις が異なっていること，(2) それ故，人をそれぞれの φύσις に適合した仕事にたずさわらせる，という所謂分業の原則の二つであった。[14] この二原則が全体を貫く原則であることは周知の通りである。[15] そしてこの原則が Rep. に於けるポリス構成員の所謂階級論にまで展開することもよく知られていることである。ところでプラトンはこの第一段階の小さなポリスを基盤にして次第にポリスを大きくしてゆき (373 B)〔即ちポリス内部の構成員を多様化してゆき〕，最善のポリス《ἀρίστη πόλις》構築へと論を進めてゆく。

この「最も必要なものだけのポリス」は百姓《γεωργός》・大工《οἰκοδόμος》・機織工《ὑφάντης》・靴工《σκυτοτόμος》等四乃至五人を構成員として始められ，逐次増員され 372 D に到ってその建設が一応終えられているが，Nettleship の評する様にそれは "the elementary conditions of society so far as it exists for the production of necesaries of life"[16] であるであろう。そしてそれはたしかに後に展開される最善のポリスでの構成員の所謂三階級の中の謂はば蓄財階級《χρηματιστικὸν γένος (or ἔθνος)》(441 A) にぞくする人々である。プラトンもこのポリスの形成される所以即ち目的を「必要」《χρεία》ということにおいている。[17] 従って対話者グラウコンに「豚どものポリス」《ὑῶν πόλις》(372 D) と評せられ，プラトンは次にもっとポリス内部を多様化した「奢侈的ポリス」《τρυφῶσα πόλις》(372 E) なるものの建設を始め，その間に於てその多様を浄化する《διακαθαίροντες》(399 E) 方途を採って次第に最善のポリス建設へと進み，蓄財階級・統治者を補佐して守護の任に当る所の補助者階級《ἐπικουρητικὸν γένος》・統治

者としての守護者階級《φυλακικὸν (or βουλευτικὸν) γένος》で構成するポリスを以て一応最善のポリスの建設を終える。(18)

最善のポリスは，直接的にはたしかに奢侈的ポリスから発展して来ている様にみられ，最も必要なものだけのポリスと奢侈的ポリスとの間には上に述べた様な一つの断層がある様にもみられる。しかしその断層は仮象ではないかと考えられる。何故なら，最も必要なものだけのポリスから奢侈的ポリスへの進展は人々の必要・要求の多様化に従ったポリス構成員の多様化（上述）にすぎないという点が先ずあげられる。もっとも，最も必要なものだけのポリスの目的は最も必要な最少限度の要求を充たすことにあり，奢侈的ポリスはこの限度を超えた要求を充たすにあるから，後者は前者の場合としては必要でないところの要求をも充たす目的を有つものとして前者と一線を劃すと考えられもするであろうが，後者の浄化されない前の多様化はプラトンが最善のポリス建設を一層きわだたすための手段とも考えられるのであって，奢侈的ポリスではやがて不必要な単なる要求は次第に整理浄化され，最小限度の必要性を超えてはいるが矢張りよき生にとって必要不可欠な要求を充たす最善のポリスが現成してくる。この「最も必要なものだけのポリスから奢侈的ポリスへの進展，後者から最善のポリスへの浄化的発展の過程」の基底に働いているのが所謂分業の原則である（先にあげたポリス建設上の二つの原則は，(2) が (1) を前提として含んでいる故(2) に，即ち分業の原則に要約されうる。詳しくは後論をみられたい)。ところで分業の原則は端的にいえばよき生《εὖ ζῆν》を目的とする手段として持ち出されたのである。それは個人の場合であれポリスの場合であれ変りはしない。人は自分の φύσις に適合した一つの仕事しか立派に《καλῶς》果たせない，従ってポリス構成員銘々が自分の φύσις に適合した仕事をすることになれば一層よい生活がしうる。(19) 即ち分業はポリス構成員全体のよき生即ち幸福を目的としたものと云える（特に 420 B–421 C 参照)。従って分業の原則がある処には必ずよき生という目的がひそんでいると考えられる。既に述べた

様に，この分業の原則は既に「最も必要なものだけのポリス」建設の際からの原則であった。そこではなる程低い段階の「必要」《χρεία》がポリスの目的となっていた。だがそれはよき生の低い段階にすぎないと考えられる。この，最も必要なものだけのポリスでの分業についても「一人の人が自分の φύσις に適合した一つの仕事を，しかも好機の間になし，他の仕事には全く手をつけない場合，その仕事はいずれも一層能率的に，一層見事に，一層容易になされるのだ」(“ἐκ δὴ τούτων πλείω τε ἕκαστα γίγνεται καὶ κάλλιον καὶ ῥᾷον, ὅταν εἷς ἓν κατὰ φύσιν καὶ ἐν καιρῷ, σχολὴν τῶν ἄλλων ἄγων, πράττῃ.” 370 C) というプラトンの主張に，低い段階ではあるが矢張りよき生を目的としていることが明らかに示されている。即ち，分業によって「最も必要なものだけのポリス」の構成員は銘々その要求を充たされた生活をしうるわけであり，ここに最善のポリスでの「構成員全体の幸福」の原型が明らかに示されていると考えられる。従って，最も必要なものだけのポリスから最善のポリスへの展開過程に於て分業の原則が一貫して働いているということは，とりもなおさずよき生という目的が一貫して維持されていることを証するものであると考えられる。ただ問題なのはそれぞれの段階で言われているよき生の内実であるが，これは最善のポリスへの発展につれて深化してゆくと考えられる。それ故にこそ，真の意味のよき生を明かにするため，プラトンは更に VI–VII 巻をその要（かなめ）となる支配者としての哲人教育の問題と善のイデアの認識の問題についやさねばならなかったのである。してみれば最も必要なものだけのポリスから奢侈的ポリスへの進展も，又後者から最善のポリスへの浄化的発展も，それの原動力となっているのは「よき生」であったということが出来る。この様にみてくるならば，最も必要なものだけのポリス建設から最善のポリス建設への過程は，よき生の内実の深化を中心としてはいるが，分業の原則で貫かれた——後者の観点からすれば連続的な発展過程といえると考えられ，建設過程に於て主として表面に出てくるのはこの分業の原則であるから，これがポリス建

設の基本的性格と考えられる。とすれば，件の"*κατὰ φύσιν οἰκισθεῖσα πόλις*"の"*κατὰ φύσιν οἰκισθεῖσα*"は最善のポリスの基本的性格だけに止まらず，ポリス建設の初段階からの一貫した基本的性格を示しているのではないかと推察されるに到る。

註

(14) Cf. 370 B("...*φύεται ἕκαστος οὐ πάνυ ὅμοιος ἑκάστῳ, ἀλλὰ διαφέρων τὴν φύσιν, ἄλλος ἐπ' ἄλλου ἔργου πρᾶξιν.*"), 374 B ("...*ἑνὶ ἑκάστῳ...ἓν ἀπεδίδομεν, πρὸς ὃ ἐπεφύκει ἕκαστος....*"), 433 A ("*ἕνα ἕκαστον ἓν δέοι ἐπιτηδεύειν τῶν περὶ τὴν πόλιν, εἰς ὃ αὐτοῦ ἡ φύσις ἐπιτηδειοτάτη πεφυκυῖα εἴη.*") etc.

(15) Cf. 370 B, C, 374 B, 394 E, 395 B, 397 E, 423 D, 433 A (特に"*ἐνθένδε δὲ δήπου καὶ πολλάκις ἐλέγομεν, εἰ μέμνησαι, ὅτι ἕνα ἕκαστον κ.τ.λ.* 〔上掲〕"), 453 B-E, 454 B ff., etc. なお例の，人々の魂にはそれぞれ誕生に際して神によって金・銀・銅・鉄が混入されたという物語《*μῦθος*》もあげるとすれば 415 A-C, 547 A.

(16) Cf. R. L. Nettleship; Lectures on The Republic of Plato, London, 1951, p. 70.

(17) Cf. *ποιήσει δὲ αὐτήν* (i. e. *πόλιν*) *ἡ ἡμετέρα χρεία* 369 C.

(18) ポリス内の三階級については 434 C, 435 B, 441 A と更に補いとして 428 D を参照。本文ではそれらを要約した。
始め守護者《*φύλακες*》は軍人と支配者を含むが，奢侈的ポリス建設の箇所では主として軍人が考えられている。後にこれが二つの階級に分かたれ，前者は補助者《*ἐπίκουροι*》(414 B 初登場)，後者は完全な守護者《*φύλακες παντελεῖς* (414 B) 乃至 *τέλεοι φύλακες* (428 D)》乃至一般には支配者《*ἄρχοντες*》(389 B で示唆，しかし 412 B までは明瞭に分かたれていない。VI, VII で充全に述べられる) と呼ばれることになる。

(19) Cf. 370 B-C, 374 A, B-C, C-D, 394 E, etc.

だがプラトン自身"*κατὰ φύσιν οἰκισθεῖσα*"の意味をこの様に語っているわけではない。ここで我々が上論から簡単に一つの結論を出せそうであるが，そうすることは又 Robinson のいう"misinterpretation by inference"を犯す謗を免かれうるとは云い難い。[20] 我々としてはあくまでプラトン自身の発言の中にその確証を探がさねばならない。その一つの手掛りがプラトン自身の次の発言に見出されうるので

はないかと考えられる。件の phrase が発言される少し前の方で，プラトンがポリスの内部統一（最善のポリスでは内部に混乱があってはならないのは当然である）ということに関して述べている中で，次の発言が注目をひく。

"*τοῦτο δὲ ἐβούλετο δηλοῦν ὅτι καὶ τοὺς ἄλλους πολίτας, πρὸς ὅ τις πέφυκεν, πρὸς τοῦτο ἕνα πρὸς ἓν ἕκαστον ἔργον δεῖ κομίζειν, ὅπως ἂν ἓν τὸ αὑτοῦ ἐπιτηδεύων ἕκαστος μὴ πολλοί, ἀλλ' εἷς γίγνηται, καὶ οὕτω δὴ ξύμπασα ἡ πόλις μία φύηται, ἀλλὰ μὴ πολλαί.*" (423 D)

「我々の主張したことはこういうことを明らかにしようとしてであった。即ち，〈守護者は勿論それ以外の〉他の市民をも亦，その各々一人一人を自己の *φύσις* に適している（*πέφυκεν*）一つ一つの仕事につかせ，各人が自己に適した一つのことに従事して多面的〈に分裂した〉人間にならず単一の〈統一ある〉人間となるようにしなければならないし，そしてその様にしてこそポリス全体も多とならず一となる——この様にさせようということにあったのだ。」

Adam は註で，この "*φύηται*" こそ注意さるべきで，この種の統一が *κατὰ φύσιν* なのだと主張しているが，結論的には論者としても賛成ではあっても，Adam 自身それについて何ら説明していないのは遺憾である。先ずこの文章をみるならば，ポリスの場合だけを "*φύηται*" とする特別な理由は一見したところ見当らない様にもみえる。むしろ前の "*γίγνηται*" に対して修辞的に変化をもたせて "*φύηται*" と表現したにすぎないとさえ考えられないこともない。人間の場合さえ "*εἷς γίγνηται*" と表現されているのであるから，ましてポリスの様な建設される《*οἰκίζεσθαι*》場合であってみれば "*φύηται*" は "*γίγνηται*" の云い換えとみて不自然ではないであろう。Shorey の註 "It is a natural grouth, not an artificial contrivance"[21] と云う短評も甚だあいまいであって，若し natural grouth を自然的に成長する意味に解するなら甚だ奇妙なことになるであろう。ポリスは人々の意図によって形成されるものであることは，当然のことながらポリス建設の最初

"*Κατὰ φύσιν οἰκισθεῖσα πόλις*" (Plato's Republic 428 E) 考の箇所でプラトンが示唆しているのであり[22]，そこには少くともよい意味での artificial な配慮がなければ，例えば先にあげた「豚どものポリス」さえ建設出来なかったであろうし，最善のポリスの内部統一に於てはなおさらそうであろう。——しかしながらそれにも不拘，この"*φύηται*"には矢張り意味があると考えられる。極く平板に解すれば"*γίγνηται*"と表現するのが極く自然と考えられるのに，それを敢えて"*φύηται*"としたのは，そこでアナロギアに考えられている個人の場合の"*πέφυκεν . . . γίγνηται*"が原因と推察される。"*φύηται*"は謂わば"*πέφυκεν . . . γίγνηται*"の凝縮なのだと考えられる。従って"*φύηται*"は表現を換えれば"*κατὰ φύσιν γίγνηται*"となるであろう。この様に解してこそ上掲の文章の意味が生きてくると考えられる。この意味で Adam の註は（但し上述の様な解釈は述べてはいないが）要をついているということが出来るであろう。そしてこの伏線があったからこそ，次に 428 E でスムーズに"*κατὰ φύσιν οἰκισθεῖσα πόλις*"と云いえたのであると考えるならば，この phrase は何ら唐突な表現ではなく，まさに自然な且つ当をえているものと考えられる。

そうしてみると上掲"*φύηται*"は"*πέφυκεν*"と内容的に密接な関連があると考えられる。上掲 423 D の一節の内容上の主旨は次の様な意味になろう。「守護者ばかりでなく他の人々も，即ちポリス構成員全部銘々が自分の *φύσις* に適した一つの仕事（*πρὸς ὅ τις πέφυκεν*）に従事すれば各人内部にも葛藤がおきないし，そうなればポリス全体も亦 *φύσις* 的に（*κατὰ φύσιν*）統一あるものとなるのだ。」ところで，各自銘々が自らの *φύσις* に適した仕事に従事するということ，即ち上掲引用で云えば"*πρὸς ὅ τις πέφυκεν, πρὸς τοῦτο ἕνα πρὸς ἓν ἕκαστον ἔργον δεῖ κομίζειν*"という主張は既に言及した所謂分業の原則の主張である。従って上の主張は簡単にいえば，分業の原則に従えば個人としても統一が保たれるし，ポリスとしても同様であるという主張なのだと解される。とすれば，ポリスが *κατὰ φύσιν* に統一体になるといった際の *κατὰ φύσιν* の *φύσις* は，「分業の原則に則ること」を内容

とするものであり，従って又“κατὰ φύσιν οἰκισθεῖσα πόλις”の φύσις も同じ意味と推察される。ところでプラトンは Rep. に於て，分業の原則に則る以外にポリス建設の方途はないとみている。(23) 又ポリスは既に述べた様に，ひとりでに発生するものではなく，人々によって目的意識的に建設されるものである。してみれば，「分業の原則に則ること」はポリス構成員にとって規範的意味を有つものであり，分業の原則の充全な実現がポリスの目的・達成点（τέλος）であると考えられる。(24) 従って件の“κατὰ φύσιν”の φύσις はポリスの「あるべき本性」（即ち「あるがままの本性」に対して——Adam の主張の一部を借用すれば）(25) といえるであろう。そしてこの φύσις の意味を「あるべき本性」とすることに限っていえば，Adam 系統の解釈は首肯さるべきであるということが出来る（但し論者は Adam 系統の解釈に凡る意味で賛成しているわけではないことを予め付言しておきたい）。(26)

註

(20) R. Robinson; op. cit. “misinterpretation by inference”とは次の様な場合である。“Plato says p, and p implies q; therefore Plato meant q.” この様な推定をする際には誤りを犯す。かかる推定は必ずしも妥当ではないからである。何故ならプラトンは「pはqを意味しない」と考えたかも知れないし，或は「pはqを意味する」という示唆を彼は考えなかったかも知れないし，或はqなる命題それ自身を思いつかなかったかも知れないからである。

(21) Cf. P. Shorey; Plato: Republic, I, (Loeb), p. 329.

(22) プラトンがポリス建設の最初に当って，「ポリスは我々個々人が自足的ではなく多くのものを不足しているという事実から生ずるのだ。……そういうわけで人々は銘々，別々の必要に応じてそれぞれぞれ別々の人々を迎え入れるのだが，我々は多くのものを必要とするので，多数の共同者・援助者を一つの住居に集める——この共同団体のことを我々はポリスと名づけるのだ」（monologue の形にした大意。369 B-C）という彼の主張にそのことは充分示されていると考えられる。

(23) ポリス建設の始めのところで，最も必要なものだけのポリスの構成員の在り方を問題としてプラトンは次の様な発言をしている。即ち㈠構成員銘々が他者とちがった仕事をそれぞれ一手に引受けてすべきか，それとも㈡構成員銘々が自分に必要な仕事を全部なし，他者と労苦を分ち合わず自分だけ

で自分のことを済ますべきか，という二者択一の質問を提起した上で，対話者に㈠の方に賛成させている（何故なら，㈡をとれば結局は個人独りで生活出来るだろうという応答をプラトンが用意しているのは明かと考えられるから）(cf. 369 E–370 A)。この後に，人それぞれの φύσις にもとづく所謂分業の主張が提起されてくるのであるが，プラトンはこの主張の前に，上に指摘した様にポリス形成の方途は分業によらなければならず，又それ以外に他の方途のありえないことを示している。

なお第三の方途がありうるかどうかの問題は又別の問題である。

(24) 最善のポリスでは φύσις を異にする三階級がそれぞれの本務を遂行 (οἰκειοπραγία) する。即ち三階級はそれぞれ所謂 τὸ αὑτοῦ πράττειν καὶ μὴ πολυπραγμονεῖν i.e. ἕνα ἓν κατὰ φύσιν πράττειν するとされている。(cf. 433 A, C, 435 B)。なおこの本務遂行（換言すれば τὸ αὑτοῦ πράττειν）とは，各階級の φύσις からして，それを有機的統一体としてのポリスの見地に立ってみる時，「支配と被支配とに関して τὸ αὑτοῦ πράττειν すること」である。

(25) Cf. J. Adam; op. cit. Vol. I, p. 95 "It is not... nature as it is, but as it ought to be, which is the foundation on which the Platonic State is built." 但し Adam はこの "nature" を "human nature" と述べているのであるが，その "human" を削除した引用である。

(26) 詳しく云えば，Adam 系統の見解にも強調するところに多少の相異がある。要点をあげれば，Adam はこの φύσις は人間精神の φύσις（ポリスは市民の集合体であるから）であるとし，しかもこの人間精神の φύσις を「あるべき本性」と解している (cf. op. cit. Vol. I, p. 59; Vol. II, p. 511, Index II)。Benn は，分業の乃至は有機的に組織された専門化の原則——就中支配すべきものが支配し，凡る構成員をしてその適合した活動をさせること——これをこの φύσις の内容と解している (cf. op. cit. pp. 36–37)。Krohn は Benn の主張に近く，規範関係 (Normalverhältniss) と解する。即ち各々をしてその能力に適合した仕事につかせることである。かかる意味の φύσις には (1) 各人それぞれその φύσις が異なること，従って (2) 各人の φύσις に適合した仕事につかせること，という二つの見地が統一されて含まれている，とみる。Benn の見解と特に異なる点はかかる φύσις を Benn が宇宙の法則の面からみようとするのに対し，倫理的動機を含んでいる点を強調していることであろう (cf. Die Platonische Frage, SS. 7–8)。

だが以上の論を以て，上掲の "φύηται (i.e. κατὰ φύσιν γίγνηται)" (423 D), "κατὰ φύσιν οἰκισθεῖσα πόλις" (428 E) の φύσις の意味を尽してしまったとすることは出来ない。上述で明らかにした様に，こ

の *φύσις* は 423 D の "*πέφυκεν*" に関わりを有ったものであった。我々としてはこの "*πέφυκεν*" の意味の検討を果たして，始めて主題の充分な解明に達するといえる。

この当の "*πέφυκεν*" を含む phrase "*πρὸς ὅ τις πέφυκεν, πρὸς τοῦτο ἕνα πρὸς ἓν ἕκαστον ἔργον δεῖ κομίζειν*" (423 D) は既に言及した通り分業の原則の主張であり，ポリス建設の始めから主張されてきたものであった。ところがこの分業の原則は，先にポリス建設の大要を述べた際，要約的に言及した様に「人はそれぞれその *φύσις* が異なっている」という，ポリス建設の原則の一つにもとづくものであった。我我はそれをもっとプラトンの言に即して明らかにすべく，この原則が提起された最初の箇所を検討してみなければならない。プラトンはその箇所で次の様に述べている。

"*πρῶτον μὲν φύεταί ἕκαστος οὐ πάνυ ὅμοιος ἑκάστῳ, ἀλλὰ διαφέρων τὴν φύσιν, ἄλλος ἐπ' ἄλλου ἔργου πρᾶξιν.*" (370 A–B).

「先ず第一に，人は銘々お互に全く似た性質に生れついている (*φύεται*) わけではなく，それぞれその *φύσις* が異なっており，それぞれ別々の仕事をするのに向いているのだ。」

これは，人の *φύσις* はそれぞれ異なっていることと分業の原則との連関を示しており，しかも前者は後者の根拠になることを示唆している。このことをもっと明瞭にしているのが先に掲げた「〈守護者は勿論，それ以外の〉他の市民たちをも亦，その各々一人一人を自己の *φύσις* に適している一つ一つの仕事につかせねばならない ("*πρὸς ὅ τις πέφυκεν, πρὸς τοῦτο ἕνα πρὸς ἓν ἕκαστον δεῖ κομίζειν*")」(423 D) という主張である。分業の原則は単なる分業の原則なのではなく，人の *φύσις* に適合した分業の原則であることを改めてここに強調するのは蛇足ではあるまい。要するに，よき生は分業によって始めて実現可能の緒につき，その分業とは人の *φύσις* に適合した分業であって，この意味での分業の原則が最善のポリス実現への形成原理となっている。先にポリス建設過程の大要を述べた際，人の *φύσις* の相異と分業の二つの原

則がポリス構成員の所謂階級（即ち最善のポリスを構成する階級）論にまで展開すると述べたが，その原則は結局この意味の分業であったことを改めて強調したい。[27] してみれば分業の原則はプラトンの人間についての φύσις 観にもとづくものであることが明らかにされたということが出来る。

では今問題になっている "φύεται" 或は "τὴν φύσιν" はどの様な意味なのだろうか。

その前に，ポリス建設の過程で人の φύσις についてプラトンが言及する際，人の何の φύσις を意味しているのかを明らかにしておかなくてはならない。Rep. で云われている人の φύσις は，よくいわれている様に直ちに人の精神《ψυχή》の φύσις を意味するとは限らない。事実例えば 444 D, 445 A–B では人の身体の φύσις について言及されている。それどころか今ここで問題はなっている「人は銘々その φύσις が異なっている」(370 A–B) という主張の少し後で，最も必要なものだけのポリスの構成員として賃金労働者《μισθωτοί》があげられているが，彼等は知能《διάνοια》の点では構成員の資格はないが，体力《ἡ τοῦ σώματος ἰσχύς》の点で構成員に加えられているのである (371 E)。従って上掲 370 A–B の主張の φύσις は必ずしも直ちに Adam の如く "the nature of human soul"[28] と一義的に断定するのは不当であろう。370 A–B の主張では，人の φύσις は「精神の」φύσις よりもっと広く，それだけに又やや漠然と考えられているのではないかと考えられる。しかしそうはいっても，人の φύσις についての言及の大部分のしかも重要な部分は，人の精神《ψυχή》の φύσις を意味しており，プラトンの主眼もそこにあったということが出来る。ここでは証拠として，その最終的展開としての三階級が精神《ψυχή》の φύσις の相異に適合した分業にもとづいていることを指摘するに止める。

論の本筋にたちかえって——先にあげた 370 A–B の主張にある "φύεται" "τὴν φύσιν" の意味は，その意味内容の解釈に異論があり，[29] 又プラトン自身も何ら詳しいまとまった説明を我々に語っていないの

が実情である。そもそも上掲の主張の提起の仕方からして何か唐突な感を我々にいだかせるともみられる。即ち，その前で，最も必要なものだけのポリス構成員の在り方が分業によらなくてはポリスを形成出来ないことを主張して（註㉓参照）から，「思いついたのだが……(ἐννοῶ)」として上の主張が導入されている。もっともこの様な導入の仕方はプラトンのよく使う手口といえばいえるかも知れない。しかしこの主張はクセノフォンのMemorabiliaにあげられているソクラテスの主張と可成り似ているので，そうしたソクラテスの日頃の言を暗に指しているとも考えられるのである。先ずMemorabiliaのソクラテスの主張を検討しよう。

"*οἶμαι μὲν ὥσπερ σῶμα σώματος ἰσχυρότερον πρὸς τοὺς πόνους φύεται, οὕτω καὶ ψυχὴν ψυχῆς ἐρρωμενέστεραν πρὸς τὰ δεινὰ φύσει γίγνεσθαι. ὁρῶ γὰρ ἐν τοῖς αὐτοῖς νόμοις τε καὶ ἔθεσι τρεφομένους πολὺ διαφέροντας ἀλλήλων τόλμῃ. . . . ὁρῶ δ' ἔγωγε καὶ ἐπὶ τῶν ἄλλων πάντων ὁμοίως καὶ φύσει διαφέροντας ἀλλήλων τοὺς ἀνθρώπους καὶ ἐπιμελείᾳ πολὺ ἐπιδιδόντας.*" (III, ix, 1–3)

「ある身体が他の身体よりももっと労働に対して強健に生れついている（*φύεται*）様に，ある精神も他の精神よりも危険に対して生れつき（*φύσει*）大胆であると私は思う。というのは，同じ法律や慣習のもとで育てられた者が勇敢さに於て互に甚だ相違しているのをみるからである。……他の凡ることがらの場合にも同様に，人々は生れつき（*φύσει*）相違してもいるが，精励すれば非常に上達もするのを私としてはみているのだ。」

これは極く当り前の日常経験する事実を語っているとみられる。今日の我々にしても承伏する事実である。ところでプラトンの先の主張はこの様なMemorabiliaのソクラテスの主張をもっと簡単に言い換えているとみられはしないであろうか。実際，先のプラトンの主張にある人の*φύσις*は，既に述べた様に賃金労働者の体力の点——Memorabiliaのソクラテスの言でいえば身体の生れつきの相違，にまで及んで

いるのである。370 A–B の件の主張を余り深刻に読みこむことは context の上からも甚だ不自然ではないかと考えられる。むしろ Jowett & Campbell の主張する様に，この「人の φύσις」を生れついた素質乃至は資質と解するのが最も自然な解釈と考えられる(註㉙参照)。そうすれば，それ以下に述べられている様な，百姓とか大工とかの仕事に生れつきむいている者がそれぞれ百姓や大工の仕事を専ら為るところの最も必要なものだけのポリス建設は至極当り前のものとして我々にうけとられるであろう。[30] 若しこの場合の人の φύσις があるべき本性即ち τέλος としての φύσις だとするならば，生れながらにして大工や百姓にならなければならない，それ以外にはむかない，如何ともし難いさだめといった様な要素を負っていることになり，従ってプラトンもこの最も必要なものだけのポリス建設を論ずるに当ってその様な意味のさだめについて何らか言及したことであろう。ところがプラトンは対話者をして何の疑念も質問もさせずに 370 A–B の件の主張を肯定させているのである。[31] 370 A–B の件の主張での人の φύσις とは，上掲 Memorabilia のソクラテスの主張と同じく「生れつきの素質乃至は資質」しかも主としては人間精神《ψυχή》のそれを意味しているのであって，その主旨は，生れながらの素質は人それぞれちがっており，従ってその素質にむいた仕事がそれぞれあるのだという日常の経験的事実にもとづいた主張であり，それ以上の意味でもそれ以下の意味でもないと考えられる。

註

(27) Cf. 434 C, 435 B.

(28) Cf. Adam; op. cit. Vol. I, p. 95.

(29) Adam (長沢氏も) はこの φύσις, φύεται を重要視し，人間精神の真にして固有の個性を形成するもの，しかもあるべき本性 (human nature as it ought to be) の意味さえ読みこもうとする。それに対して Jowett & Campbell は生れつきの素質 (natural aptitude) と解し (cf. Vol. III, Notes)，更にその Essay では "Φύσις is constantly used in the Republic in the ordinary sense of natural disposition or capability as distinguished from the complete development of mind or character:— 410 D τὸ θυμοειδὲς ... τῆς

φύσεως, 485 A τὴν φύσιν αὐτῶν πρῶτον δεῖν καταμαθεῖν." (Campbell) とさえ述べている (cf. Vol. II, pp. 320-321)。両者は明かに対立した見解とみられる。

(30) Rep. でのポリス建設の過程は，アリストテレスの Politica, I, ii にみられる様な発生史的見地に立っているのではなく，又単に思考の論理的所産でもなく，むしろ現実のポリスの分析を通じての再構成と考えられる。最も必要なものだけのポリスも従って，ポリスの歴史的発展段階に於いて何時の時代にか存在したという様なものではない。この理解の上に立っての論者の発言である。

(31) 実は，Rep. に於ける人の φύσις の問題は主題に劣らぬ重要な問題なのである。それを詳論するのは他日を期したい。しかし Nettleship の "The whole *Republic* is really an attempt to interpret human nature psychologically." という評は至当である (cf. Lectures on the Republic of Plato, London, 1951, p. 68)。この様な重要な問題の取扱いにはプラトンは慎重を極めるのが普通であって，例えば愛智者(哲人)を論ずる際の取扱いをみられたい(V巻)。プラトンは愛智者の取扱いを初歩的意味から初めており(475C)，しかも対話者に反論を許しながら (475 D-E) 論を進めてゆく程慎重に事を運んでいる。

しかしながら Rep. に於けるプラトンの人間精神の φύσις 観はそれ程単純なものではない。Rep. には，人間精神の φύσις をあるべき本性 (τέλος としての φύσις) とみている場合があることを否定出来ない。勿論人間を目的措定的存在とみることはプラトンの人間観の基本となっている。(32) 従って，例えば柿の種子が生長の完成態として柿の木になる場合にみられる様な柿の本性《φύσις》(即ち τέλος としての φύσις) の如き意味で，人間精神の本性《φύσις》を語ることはできないであろう。しかし最善のポリス，即ちあるべき完成点に達したポリスの構成員である三階級は分業の整理浄化された完成態であるとみられる。そしてプラトンはこの三階級はそれぞれ φύσις が異なるとみている。(33) 階級はとりもなおさず階級に属する人々なのであるから，三階級の φύσις が異なるとは，その中の或る階級に属する人々の φύσις は別の階級に属する人々の φύσις と異なるという意味である。この際の φύσις は 370 A-B での φύσις の様に「生れつきの素質」の如き意味に解するこ

とは許されないであろう。各階級者はそれぞれ別の階級の者の職務に介入することは許されない（例えば 434 B–C）程厳しく区別され，その職務に専従すること（*οἰκειοπραγία*, 434 C），即ち *τὸ αὑτοῦ 〈κατὰ φύσιν〉 πράττειν* することを要求されている。しかもかかる階級は適切な教育の結実であることは，例えば補助者階級である軍人の教育（II, xvii–III, xviii），更に支配者階級の哲人の教育（VI, xv–VII, xviii）に示されていると考えられる。してみれば三階級の *φύσις* の相異とは，human character の相異（Cornford）或は，性質の相異（長沢氏）ではなく，完成態に於てみられた *φύσις* 即ち *τέλος* としての *φύσις* 即ちあるべき本性の相異と解さざるをえない。従って又各階級者の *φύσις* も同じ意味と解され，各階級者は「自らの任務を自らの本性に従って実行する（*τὸ αὑτοῦ κατὰ φύσιν πράττειν*）」ことに於て最善のポリスは維持されるのである。この様にみてくるとき，"*οὕτω ξυμπάσης τῆς πόλεως αὐξαμένης καὶ καλῶς οἰκιζομένης ἐατέον ὅπως ἑκάστοις τοῖς ἔθνεσιν ἡ φύσις ἀποδίδωσι τοῦ μεταλαμβάνειν εὐδαιμονίας*" (421 C) という最善のポリスの目的についてのプラトンの発言に於ける "*φύσις*" も「各階級のあるべき本性」と解すのが至当と考えられる。(34)

註

(32) Cf. Phaedo, 95 E–102 A（ソクラテスの自叙伝風の話）。その中特に 98 B–99 B 参照。そこでは，ソクラテスが逃亡せずに獄舎に居ることがソクラテス自らの理性的判断にもとづいた行為であることが物語られている。

(33) Cf. *ἀλλὰ μέντοι πόλις γε ἔδοξεν εἶναι δικαία, ὅτι ἐν αὐτῇ τριττὰ γένη φύσεων ἐνόντα τὸ αὑτῶν ἕκαστον ἔπραττεν.* (435 B). この "*τριττὰ γένη φύσεων*" は，その意味のとり方に於て諸訳に可成り相違があるが，前後の context の上からしても，「*φύσις* の異なった三階級」を意味していると考えられる。

(34) この "*ἡ φύσις*" の訳にも矢張り異解がある。単に "die Natur" (Schleiermacher, Apelt)，"自然"（長沢氏），それに対して "その本性"（山本氏），"its nature" (Shorey)，"their nature" (Cornford) 等である。これは矢張り Cornford 訳が最も正確である。*ἡ φύσις* を主語とする類例（語の用法上の）としては例えば Phaedo 80 A の一文（Bluck 訳が最も適切。Cf. R. S. Bluck; Plato's Phaedo, Routledge, 1955, Apelt, Sehleiermacher

其他の訳と比較されたい。）があげられる。
本文引用原文の訳：「その様にしてポリス全体が成長し，美わしく形成されれば，各階級がそれら階級の本性に相当するだけのふさわしい幸福にあづかるようにしてやらなければならない。」（Cornford 訳は諸訳に比して実に適切なる訳（それだけにかなり意訳気味）をつけているが，敢えて拙訳を試みた。なお文法上の問題は Jowett & Campbell 註が妥当と考える。）
ここには階級の優劣の思想がひそんでいるが，その問題は当論文では割愛した。

ではプラトンの，Rep. に於ける人間精神《ψυχή》の φύσις 観のこの二面，即ち「生れつきの素質としての φύσις」と「τέλος としての φύσις」はどの様に関連するのだろうか。ここで漸く我々は上論から，この問題解明の手掛りとして教育の問題を考察する段階にたち到った。プラトンの教育観が最も顕著に現われているのは所謂哲人教育に於てである。プラトンにあっては教育《παιδεία》とは端的にいえば「転向させる術知《τέχνη τῆς περιαγωγῆς》(518 D) であって，単に知識を注入することではない，とみられている。転向させる対象は結局精神《ψυχή》が中心となるが，就中精神の生れつきの素質《φύσις》である。素質者は可能性の段階にあり，その素質の開花は教育を待たなければならない。素質は教育の如何によって善くもなれば悪しくもなる。例えば愛智的素質も適切な教育によれば成長開花して必ず凡る徳《ἀρετή》に達するが，反対の環境にあれば全く反対の人間になってしまうともいわれている (492 A)。しかしプラトンは教育が，人それぞれの素質《φύσις》そのものを全く造りかえてしまうとは考えていない。(35) プラトンの教育観はあくまで人間それぞれの素質の περιαγωγή なのである。しかしながら又哲人教育過程の各段階に於ける厳しい適性検査にもとづく選抜は何を意味するのであろうか（特に VII, xv–xviii)。彼は人間それぞれの素質には教育を以てしても如何ともし難い傾向性と限界がそれぞれにあることを我々に示しているのではないかと考えられる。この様な教育体験と，日常的事実に於てみられる素質のそれぞれの傾向性の相異についての経験的知識とからしてプラトンは素質

の中にあるべき本性を洞察するに到ったのではないかと考えられる。しかし Rep. ではこの問題についての充全な理論《λόγος》は展開されていない様にみられる。プラトンはしかし，それを理由づけようと試みていることも事実である。それが，所謂金・銀・銅・鉄の種族 (547A)，即ち III 巻にある有名な物語《μῦθος》，神は支配者《ἄρχοντες》をつくる時にはその誕生の際に金《χρυσός》を，補助者《ἐπίκουροι》には銀《ἄργυρος》を，百姓や職人《γεωργοί, δημιουργοί》には鉄と銅《σίδηλος, χαλκός》を，魂《ψυχή》のうちに混ぜたという話の紹介 (415 A–C) と，X 巻のエルの物語《μῦθος》即ち魂《ψυχή》がこの世に再生するに当って，生涯《βίοι》の種々の見本《παραδείγματα》の選択だけは魂自らの責任に於て行われるという話 (617 D–618 A) にみられるであろう。これらの物語は我々に，人間はこの世に生れるに当って既に τέλος としての φύσις を負って来ていることを，従って教育さえもそれを如何ともし難く，たかだかその φύσις を善導しうるにすぎないのではないかとさえ感じさせる。この様なミュトスの語るところを中心に考えれば——しかも特に III 巻のミュトスは 370 A–B の件の主張に比較的近い処で述べられているので，370 A–B の件の φύσις もあるいは τέλος としての φύσις であると解されもするかも知れない。

しかしながら，ミュトスはあくまでミュトスであってロゴスではないことを我々は銘記すべきであろう。しかも III 巻の例のミュトスの提唱は慎重を極めた躊躇を以って，必要万止むをえない偽《ψευδῆ τῶν ἐν δέοντι γιγνομένων》(414 B)[36] の中のすぐれたものの一つを語ろうという形でなされているのである。プラトンのミュトスの意義をどの様にみるべきか論者としては遺憾ながらいまだ未解決ではあるが，ミュトスはあくまでミュトスでありロゴスとは一線を劃すべきであるとすることは基本的に妥当な一線であると考えられる。プラトンは初期対話篇 Meno で知識《ἐπιστήμη》の本質を根拠の推理《αἰτίας λογισμός》であること，つまりあくまで λόγος であることを強調していることを忘れてはならないであろう。[37]

要するに，人にはそれぞれ生れつきの素質があるという日常の経験的事実を，教育体験によるところの，人には生来如何ともし難いその人にとっての本性（*τέλος* としての *φύσις*）的要素が内在しているという洞察からして，プラトンはミュトスを以って前者の事実を解釈しているとみられる。

なおプラトンは，幼少の頃からの継続的な模倣《*μίμησις*》（即ち学習）により〈第二の〉の本性《*φύσις*》が形成されることも述べており（395 D），プラトンの，人間に関する *φύσις* 観は甚だ複雑である。以上ではかかる *φύσις* 観の基本的と考えられる面を明らかにしようと試みた。

註

（35） 519 A–B で述べられている視力の例などがそうしたプラトンの考えを示唆していると考えられる。

（36） 訳は Jowett & Campbell 註の訳を採った。異解もあることを付記する。

（37） Cf. 98 A. もっともそこでは *ἐπιστήμη* は *δόξα* との対立に於て論じられている。

以上我々はプラトンの，人間についての *φύσις* 観の本質を検討して来た。本稿の主題である“*κατὰ φύσιν οἰκισθεῖσα πόλις*”の *φύσις* の背景には少くともかかるプラトンの人間に関する *φύσις* 観がひそんでいるとみられ，我々としてはかかる人間の *φύσις* 観を基底において，件の Phrase の意味を理解しなければならないし，従っ又所謂理想国の性格も，又 Rep. の主題である *δικαιοσύνη* 即ち各階級の乃至は個人の *τὸ αὑτοῦ* 〈*κατὰ φύσιν*〉 *πράττειν* の理解も，かかる人間の *φύσις* 観の理解の上に始めて至当な理解が許されると考えられる。